

最終報告書

報告者氏名：八重樫 美由紀

所属：盛岡市立津志田小学校

記録日：27年 2月 14日

【対象児の情報】

○学年 5年（11歳）

○障害名 知的面でのゆっくりとした発達

○障害と困難の内容

- ・漢字を覚えることが苦手である。
- ・字形を整えて書くことが苦手である。
- ・忘れ物が多く、遅刻することもある。
- ・国語や算数において、集団の中での学習に苦手意識がある。

【活動報告】

○当初のねらい

- ① 自分に合った漢字学習の方法を理解し、漢字の読み書きの定着を図る。
- ② 目的意識をもって家庭学習に取り組むことができる。
- ③ 前日に学校の持ち物の準備をする方法を身に付ける。
- ④ 学級の中でのiPad等のICT機器を使った学習に慣れる。
- ⑤ 交流及び共同学習でも活用できるように、苦手さを軽減する学習スキルを身につける。

○実施期間 2014年6月2日から2015年2月5日まで

○実施者 八重樫美由紀

○実施者と対象児の関係 担任

【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

- ・漢字を覚えることが苦手である。4年生の漢字を学習しており、練習直後のテストでは書くことができるが、日常的にその漢字を使って書くことはあまりない。しかし、既習の漢字を読んだり、適切な漢字を選んだりする事はできる。
- ・パソコンでの学習に意欲的に取り組み、iPadでの学習にも興味を持っている。
- ・WISC-Ⅳの全検査IQ63（指標間の有意差無し）であることから知的な面での困難さが明らかになっている。国・算・総合以外は通常学級で学習しており、交流及び共同学習への参加態度は非常に良い。学習内容は5割程度理解している。
- ・本児は2年生まで通常学級に在籍して学習をしていたが、小集団の中での学習を希望し、3年生から特別支援学級に在籍を変更した。しかし、その後の学習の状況から、国語と算数でも集団の中で学習できるようになることを目指し、困難さを軽減する学習スキルを身に付ける必要がある。
- ・家庭学習を毎日する習慣はあるが、短時間で取り組もうとする為、粗末な字で終わらせてしまうことがある。
- ・家庭環境と不注意な面があることから、生活リズムが乱れやすい。そのため、忘れ物が多く、遅刻することもある。
- ・親戚のiPadや母親のiPhoneを少し触った事がある程度で、学校の中でiPadでの学習をするのは初めてである。学級のiPadは児童4人に1台あるが、子供たちのニーズに対し台数が不足する状態とならないように、活用方法や内容の検討が必要な状態である。

○活動の具体的内容

- ① 漢字アプリを使って、大きい画面で書く練習をすることにより正確に漢字を覚え、正しく書く習慣を身につけていく(図1・2)。1日漢字5文字取り組み、翌日のテストに合格すると新しい漢字に進む。「ゆびドリル」では1文字3回以上書き、一覧表に学習の履歴を残していく(図3)。その際、筆順を確認する機能も利用し、可能な限り正しい筆順で書くようにする。下村式の漢字練習ノート(図4)とマスのある大きな漢字ノート(1ページ45字)も併用し、鉛筆で正確に書く練習も続ける。→「ゆびドリル」(図1)



図1【ゆびドリル】



図2【なぞりながら、字形を確認できる】



図3【学習履歴の一覧表】
(なぞって書いた自分の字が残る)



図4【下村式の漢字練習ノート】

- ② 家庭学習が翌日の学習に役立つという目的意識を持つことができるように、音読発表会と毎日の漢字テストを実施する。それぞれの取り組みを『音読大作戦』『漢字大作戦』として、児童と作戦を考えながら進め、主体的に取り組むことができるようにしていく。

音読発表会は単元の始め等を実施し、各自が家庭学習で練習してきた文章を音読して発表する。その様子をiPadで録画し、EZCastを使用して大型テレビに映し振り返りをする。音読練習の方法は、家庭学習でデジ教科書を使って漢字の読みを確認して教科書にルビを振ったり、読み上げ機能を利用して聞いたりしてから取り組む(図5・6)。さらに、音読した場面を視写することで、漢字の読みの確認と物語の内容の大まかな理解をしやすくする。

漢字テストは、家庭学習で練習した漢字を翌日テストする。しっかり練習すると合格できるという体験を積み主体的に取り組むことができるようにする。漢字練習の方法は①の取り組み内容で行う。

→「VoiceOfDaisy」(図5)「カメラ」



図5【VoiceOfDaisy】

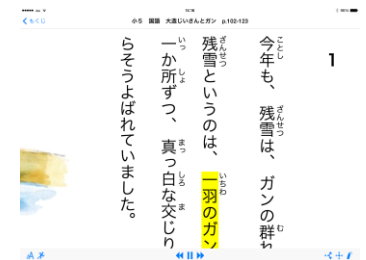


図6【デジ教科書の画面】
(教材文の読みの確認ができる)

③ 保護者と児童と担任で帰宅後の生活について話し合い、家庭での生活のスケジュールを立てる。宿題をする時間や次の日の準備をする時間をきちんと確保することができるように具体的な時間を確認する。

また、スケジュールの中の持ち物の準備がスムーズにできるように、「はなまる」(図7)のアプリを使って、手順を分かりやすく示し(図8)、児童が自分で準備ができたかどうか確認でき、スタンプカード(図9)を利用して達成感をもつことができるようにする。 → 「はなまる」(図7)

④ 学級の中で iPad の学習をしやすい雰囲気をつくる為に、iPad で学級のみならず一緒に学習できる場を設定する。

その際、iPad を使うときには『iPad の約束』(図 10)を守らなければならないことを実際に使う場面で指導していく。

学習指導要領の内容に沿った「教科書クイズファミリー」のアプリは4チームに分かれて早押しクイズをする形式になっており、どの子も意欲的に参加できるアプリである(図 11・12)。授業の終わりに教科書クイズの時間を設定し、授業の個別課題が終わった児童からチーム分けをし、全員自分の個別課題が終わってから始める。

「言葉と文」のアプリは選択問題の形式になっているので、各自の意見を出し合い、正解を調べるクイズ形式にして取り組む(図 13・14)。授業の始めの一斉形式の授業の場面で用いる。 → 「教科書クイズファミリー」(図 11・12)「言葉と文」(図 13・14)

- iPad の約束**

 - ① 順番を守る。
 - ② 机の上で使う。
 - ③ 時間を守る。
 - ④ 終わったら先生に返す。

図 10 【iPad の約束】



図 11 【教科書クイズファミリー】



図 12 【「教科書クイズファミリー」の画面】
(4チームに分かれてクイズ形式で学習ができる)



図 13 【言葉と文】

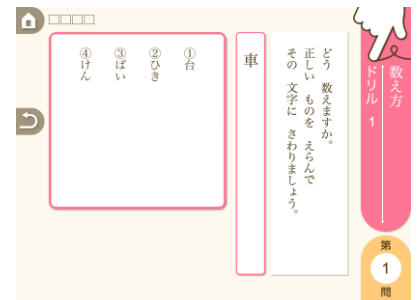


図 14 【「言葉と文」の画面】
(選択問題形式になっており、自分の意見を持って、学習に参加しやすい)

○対象児の事後の変化

①の取り組みを通して

児童は正確に書こうとする意識が高まった。正確な字形を学習することができるので、誤字を書くことは少なくなった。間違っただけ覚えた場合は、授業の中で「ゆびドリル」のアプリで確認して正確に書くことができるようにした。iPadの大きな画面で練習した漢字は、漢字ノートのマスの中にも正確に書くことができた。「ゆびドリル」のアプリは練習した漢字の中から1字を選んで一覧表に残すことができるので、きれいな字を残そうと意識すると共に、自分が学習した漢字の足跡が残るため意欲化に繋がっていると思われた。



図7【はなまる】



図8【手順の画面】

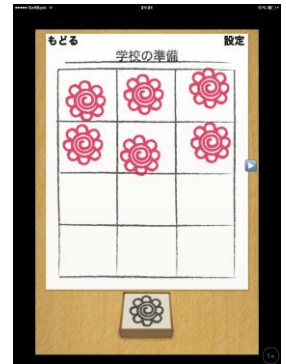


図9【スタンプカードの画面】

(手順を全て達成するとスタンプカードに花丸を付き、一杯になると褒美がもらえる)

②の取り組みを通して

『音読大作戦』による音読発表会への取り組みによって、本児の音読は非常に上手になった。次の日の授業で音読を発表する事を意識して練習したため、意欲も技能も向上したと思われた。また、授業で音読のめあてを明確にして相互評価したので、めあてに沿って意欲的に取り組む姿も見られた。校内の全体研究会で授業を公開したので、他の教員からも褒められた経験も意欲に繋がった。新しい教材文に入った頃等に定期的に音読発表会を実施する事により、音読の取り組みへの意欲が持続し、良い音読が習慣になっていくのではないかとと思われた。また、教材文の学習の前にデイジー教科書で漢字の読みの確認ができていた為、学習の際に漢字の読みが学習の障害となることが減り、安心して音読することができた。

漢字テストへの取り組みは、これまでも毎日行ってきた。しかし、なかなか正確に覚えることができず、合格する為に苦労していた。しかし、今回『漢字大作戦』によるiPadでの練習を取り入れることにより、漢字練習が丁寧に、しかもポイントを押さえたものになっていた。漢字のポイントを正確に覚える手段として効果的であると感じた。取り組みやすい方法で練習した結果、翌日の漢字テストで合格することができたことで、漢字練習への意欲が増してきたように感じた。

③の取り組みを通して

本児は2学期になって、自分で早起きを頑張ろうという意識の変化から朝寝坊をして遅刻する事はなくなった。しかし、忘れ物はなかなか改善されなかった。1学期に保護者と話し合った結果、家庭でチェック表を作成して取り組むこととなり、家庭と協力して取り組んだ。

しかし、なかなか効果が上がらず保護者も困っていた。そこで、iPadのアプリの活用を提案し了解を得た。『忘れ物大作戦』の取り組みは、児童・保護者・担任の三者で相談しながら帰宅後の生活を見直すことから始めた。いつ取り組むのかを具体的に話し合っただけで、児童も納得した内容となり意欲的に取り組むことができた。

また、翌日の持ち物の準備についても、一つ一つチェックしながら取り組むことができる「はなまる」のアプリはとても効果的だった(図7)。持ち物リストは手軽に作成や変更ができ、児童は慣れた手つきで操作することができた。リストとスタンプカードがアプリの中に一体化しているため、物の管理の苦手さを補うこともできた。持ち物を一つ揃える度に花丸を押し、全部達成するとくす玉が割れる。ご褒美としてポイント用の台紙に花丸を押し、ポイントが一杯になると保護者から10円を貰うことに決めた。ご褒美の内容も相談して決めたので、本児は真面目に取り組もうとしていた。そのため効果もすぐ

に現れたと思われる。

しかし、2学期末に保護者との面談で、物を揃える習慣はついたが、玄関から持っていくことを忘れるという実態が明らかになった。そこで、3学期からはアプリの使用は終了し、玄関に籠を置いて揃えた物を全部入れ、朝家を出る前に持ったかどうかを確認する方法を取ることにした。現在、忘れ物が少ない日が続いている。

この結果は、iPadのアプリを利用して、持ち物を自分で揃える方法と習慣を身に付けることができた為だと考えられる。そして、自分でやろうという意識が育ってきた時期と重なり、さらに効果的だったと思われる。

④の取り組みを通して

学級には情緒的に安定していない児童や、おとなしく自分の気持ちをなかなか表現できない児童がいるが、みんな一緒に「教科書クイズファミリー」や「言葉と文」のアプリに取り組むことができた。何度か繰り返す中で、学級でiPadを使って学習することが当たり前の雰囲気ができ、『iPadの約束』も守ろうとするようになってきた。

また、どの子も必要な時には個別学習等で使用し、時には学級全体で使用するという様々な学習スタイルが定着してきた。このことにより、対象児も学級で使用する事への抵抗感を感じることは無くなってきたと思われる。

【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づき

対象児は、3つの大作戦に意欲的に取り組むことができた。それぞれの取り組みには「漢字テストに合格したい。」「みんなの前で上手に音読したい。」「ポイントカードをいっぱいにしたい。」という目的があり、その目的に向かって主体的な取り組みになっていった。また、iPadのアプリの活用によって、取り組みの手立てが明確になり「こうすれば、ぼくにもできる、やってみよう。」という意欲が高まったと思われる。

○エビデンス

①の取り組みを通して

漢字テストの結果から、昨年3年生の漢字を学習していた頃と同じペースでの習得状況を維持することができた。しかし、今年度に入り、4年生の漢字の学習を始めたが、画数が多く字形も複雑になってきたため、漢字の学習への困難さが増していた。図15のように、正確に書くことが難しい漢字も増した。

しかし、図16から分かるように、iPadのアプリで練習するようになってからは、字形に気を付け丁寧に書こうとする意識は高まった。誤字に自分で気付き、正確に書き直すこともできるようになってきた。書き順も正確に覚えようと、筆順を説明している動画を自分から何度も再生して確認する姿も見られた。

本児は、字形を整えて書くことが苦手だったのではなく、字を上手に書くことができる能力を持っていたが正しい字形を理解していなかった為に書くことが困難な状態になっていたのだと思われる。これまでのノートやドリルの学習方法にiPadでの学習を加えることによって、本児は正しい漢字を理解する方法を身に付けることができた。本児が「正しい字をゆっくり書くと上手に書くことができる」ということを理解したので、自信を持って字を書くことができるように、この取り組みを継続する必要があると考えている。

また、今年度4月から1月末までに4年生の漢字の64%を漢字テストで合格している。しかし、今後は使いたい漢字を自分で調べて書く方法も身に付け、文章を書くときに自分から漢字を使って書くことができるようにすることも必要になってきたと思う。

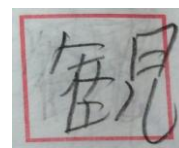


図15【iPad使用前】



図16【iPad使用后】

②の取り組みを通して

音読の為に iPad を活用し始めた頃は、音読の様子を動画に撮影したがいなかったし、良い姿勢が身に付いてなく、音読の声も小さかった（図 17）。しかし、何度か音読発表会をくり返していくと、姿勢が良くなり、堂々としかも上手に音読できるようになっていった（図 18）。自分から動画の撮影も希望するようになった。デジ教科書の使い方や音読のポイントが視覚的にも理解できた頃と時期が重なっている。みんなの前で上手に音読するにはどうしたら良いか、具体的な手立てが理解できたことが自信に繋がっていったと思われる。



図 17 《取り組み前》

③の取り組みを通して

忘れ物について iPad のアプリの使用は自分で準備する能力と習慣を身に付けるためにはとても効果的だった。一つ一つ準備することを毎日繰り返したので、iPad を使わなくてもできるようになったのだと思う。しかし、朝、玄関から持っていくという点については、わざわざ iPad をランドセルから取り出して確認するのでは無く、籠を使って簡単に視覚的に確認することで解決できた。iPad のアプリの使い方として、ある課題に限定して使い、課題が解決したら無くてもできる状況を作っていくことも大事だと感じた。本児は、今回の経験を通して、「忘れそうなことは iPad のリストに入れて確認すると大丈夫」ということを学んだ。本児は忘れ物をするという苦手さを自分で解決する方法を身に付けることができたので、具体的な場面で iPad のアプリを利用して成功体験を積み重ねていきたいと思う。今後、成長に伴って、使用するアプリや端末も変わってくると思われるので、本児の実態に合った物を選択していく必要がある。本児が自分で選択して使用できるようになるまで、周囲の大人が本児を理解し支援する体制が引き継がれていくように今から取り組みを始めたいと思っている。

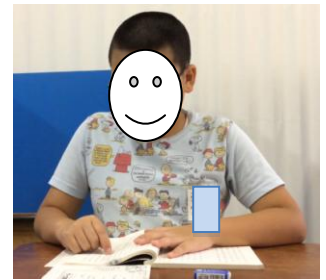


図 18 《取り組み後》
【録画した音読の様子】

④の取り組みを通して

iPad での学習が始まった頃は、珍しさもあり、学級のみんながやりたくて仕方ない雰囲気となった。なかなか『iPad の約束』を守ることができない児童もいて、落ち着いて教室の中で iPad での学習ができない状態となった。

しかし、学級のみんなでできるアプリで学習することにより、自分も iPad で学習できたという喜びを体感し、『iPad の約束』を具体的に体験しながら理解していった（図 19）。個別学習でも学級の児童全員が iPad での学習をする時間があるので、全員が自分の使う順番を待つことができるようになっていった。

今では、落ち着いた雰囲気の中で iPad での学習が成立するようになり、本児も安心して iPad での学習に取り組むことができるようになった。

また、本児は特別支援学級においては iPad での学習に自信を持って取り組むこともできるようになった。今後は通常学級でも必要な時は iPad を使うことができるように学習を展開していけると思われた。



図 19 【学級のみんなで iPad のアプリで学習の様子】

○その他のエピソード

3学期になって、iPadでの漢字の宿題をしない日が二日程続いた日があった。そこで、iPadの宿題を続けるかどうか本人と話し合った。すると、「iPadでの宿題を続けたい。」という本人の気持ちを確認することができた。そして、その後はきちんと毎日してくるようになった。やはりiPadで漢字の練習する方が理解しやすいということを自分で実感していたようであった。保護者にも家庭での取り組みの様子から、iPadでの宿題を継続するかどうか確認したところ、保護者も継続を希望した。このことから、家庭でのiPadでの学習も効果があると保護者も本人も思っていることを確認することができた。

【今後の見通し】

来年度は6年生に進級するので、中学校での学習を想定して、苦手さを補って学習に参加できる学習環境を整備していく必要がある。本児は高等学校進学を目指し、交流及び共同学習にも意欲的に取り組んでいる。中学校の学習を見通して、小学校から付けておかなければならない力を精選していかなければならない。

まず、次の3点については必ず必要な取り組みだと考える。

① 漢字の読みへの手立て

本児は、漢字にルビがあると学年相応の教材文の簡単な読み取りができる。漢字の読みの学習だけでも、学年相応の漢字まで学習を進めたいと考えている。そのために、iPadのアプリ「ゆびドリル」を用い、フラッシュカード式に漢字の読みの学習を考えている。

また、テストや読み取り問題のプリントの漢字の読みについては、本児に合った方法を考えていきたい。テスト以外の場面では、素早く漢字の読みを調べる方法を身に付けることも同時に進めていきたい。

② 算数の学習へのiPadの導入

本児は簡単なかけ算やわり算の筆算はできる。内容を精選して、基礎・基本を中心とした学習内容を学習することが望ましいと思われる。算数の学習の個別学習の中で、これまでの学習方法にiPadやノートPCでの学習を加えていきたいと考えている。単元を精選し、本児の習得の状態を確認しながら学習を進め、具体的な操作を視覚的に説明している動画等も活用したいと考えている。

③ 中学校の特別支援学級担任との連携

中学校の特別支援学級の担任とは、これまでも卒業生の引継ぎやその後の様子等を交流し合う関係はできている。しかし、進学を見据えた学習内容の相談を実施したことがなかった。来年度の個別の指導計画を作成する際に中学校の特別支援学級担任の意見も取り入れたいと考えている。その際、本児の特性やこれまで魔法のワンドで取り組んできた様子も伝えたい。そして、本児がスムーズに中学校でも有効な支援方法を継続してもらえるように、中学校と連携していきたい。

この他にも、本児の実態の変化に伴い必要な支援が明らかになると思われる。その際は、魔法のプロジェクトの多くの実践の中からヒントを得ながら、個別の指導計画を立てて取り組む必要があると考える。そして、本人・保護者・教師の話し合いを大切にして、本児のために取り組んでいくべきだと考えている。